

## 「美しく老いる」 II コリント 4：16～18

## I 導入部

おはようございます。9月の第三日曜日を迎えました。今日も、愛する皆さんと共に私たちの魂の救い主イエス・キリスト様を賛美し、礼拝できますことを感謝致します。

夏バテではなく、秋バテなるものがあるようです。疲れる、食欲がないと夏バテを経験なさった方々もおられるでしょう。秋になっても、このような夏バテの症状が続くことがあります、秋バテというようです。秋バテは、夏の時期の高温多湿、紫外線、冷房冷え、内臓冷え、寒暖差が主な要因となっているようです。また、秋バテのタイプは、夏から秋まで不調が続く、だらだら不調型タイプと夏は元気に過ごしたのに、秋になると燃え尽きたように不調が顕在（けんざい）化するタイプがあるようです。私たちは、秋バテに負けないように体も整え、神様の言葉によって、信仰によって魂と霊を整えたいと思います。

今日は、高齢者祝福礼拝という形での礼拝です。特に、後期高齢者と言われる75歳以上の方々が対象です。私たちは、今若くとも、必ず老いに近づいて行きます。美魔女なる言葉がありますが、年を重ねて高齢になっても若々しい人の事を指すのでしょうか。しかし、美魔女もやがて年を重ねると、ただの魔女になってしまうのではないのでしょうか。

第18回シルバー川柳を紹介します。「ベントから 乗り換えたのは 車椅子」「朝起きて調子いいから 医者に行く」「仲いいね いいえ夫は 杖代わり」「うまかった 何を食べたか 忘れたが」「靴下を 立って履くのは E 難度」「もう止めた 検査ばかりで 病気増え」「お揃いの 茶碗にされる 俺と猫」「納得を するまで計る 血圧計」

「私だけ 伴侶がいると 妻嘆く」「古希を過ぎ 鏡の中に 母を見る」「無宗教 今は全てが 神頼み」「懐メロが 新し過ぎて 歌えない」

年を重ね、老いるということにおいて、サプリメントや化粧で若作りをするということもいいでしょうが、年相応の生き方をしたいものです。年を重ねることが恥ずかしい事や悪い事ではなく、聖書が語るように、年を重ねることや老いるということは、神様の大きな祝福であることを覚えて、年を重ねることを受け止めたいと思うのです。

今日は、コリントの信徒への手紙第二の4章16節から18節を通して、「美しく老いる」という題でお話し致します。

## II 本論部

一、落胆しなくていい

16節には、「だから、わたしたちは落胆しません。」とあります。けれども、私たちの日常生活や信仰生活において落胆することが多くあるように思います。年を重ねて目が見

えにくくなった。耳が聞こえにくくなった。物忘れがひどくなった。足や、腰が痛くなって、歩くのにも、生活するにも苦勞が絶えない。あるいは、聖書も字が小さくて読めない。読む気がしない。祈ろうとしても祈る気力がない。礼拝に行くこと、バスや電車に乗って移動することも大変になった。礼拝の1時間、椅子に座っていることができなくなった。賛美が歌えない。メッセージが聞こえない。兄弟姉妹とあまり交わりができなくなった。と落胆することばかりだと感じることもあるのかも知れません。

このコリントの信徒への手紙は、パウロという人が書きました。クリスチャンを迫害し、撲滅するために全精力を傾けていた彼は、ダマスコ途上で復活のイエス様に出会い、捕らえられ、クリスチャンとなり、イエス様の十字架と復活を伝える人になりました。彼が、クリスチャンになってしまったのですから、ファリサイ派の人々や律法学者は、彼に対立し彼の命を狙います。そして、パウロは多くの苦勞を経験しました。落胆を経験しました。しかし、彼は「わたしたちは落胆しません。」と言うのです。その理由を、4章1節で語っています。「**こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。**」 前の新改訳聖書では、「**落胆することはありません。**」とあり、第三版の新改訳聖書では、「**勇気を失いません**」とあります。詳訳聖書では、「**全く元気を失った、力を使い果たした、恐れゆえに疲れ果てた状態にはなりません**」と説明しています。リビングバイブルでは、「**決して落胆しません**」とあります。

パウロは自分がクリスチャンの迫害者であった。救い主イエス様の敵対者であった。本来なら、自分は捨てられ、裁かれても仕方のない者であるけれども、こんな私をも愛して下さり、いや、こんな罪深い者、罪人のかしらである私のためにイエス様は十字架にかかり、復活して、私の目の前に現れ、私を受け入れ、わたしを異邦人の宣教のために召して下さった。だから、いろいろな苦しみはある。宣教に対する苦しみ、肉体的な苦しみは確かにある。けれども、福音を伝えるという務めをゆだねられていることのゆえに、落胆しない。落胆することがない。勇気を失いませんと、パウロは言うのです。

私たちにも、苦勞はあります。困難もあります。悲しい事も辛い事もあります。絶望することもあるでしょう。イエス様に望みを置いて、今自分のできることを精一杯やりたいと思うのです。たとえ、1しかできなくても、10できたとしても、何もできなかったとしても、落胆することなく、キリスト者として召された者として、全ての事を相働きて益にして下さるイエス様に望みを置いて歩みたいと思うのです。

「**見ているだけで**」という星野富弘さんの詩があります。

「**見ているだけで 何も描けず 一日が終わった こんな日と**

**大きな事をやりとげた日と 同じ価値を見出せる 心になりたい**」

私たちは、何もできない自分と大きな事をできた自分を変わずに愛して下さるイエス様の愛に感謝したいと思います。年を重ね、いろいろな事ができなくなった自分を価値ある存在として受け入れて下さるイエス様に望みを置いて歩みたいと思うのです。

## 二、見えないものの目を注ぐ

また、落胆しない理由としてパウロは、16節の後半で語ります。「**たとえわたしたち**

の「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」リビングバイブルでは、「肉体はしだいに衰えますが、うちにある力は日ごとに強くなってゆきます。」とあります。私たちは、誰もが年齢を重ねて、自分の肉体が衰えていくことに気づきます。10代や20代の方々は、まだそのあたりのことは理解できないかも知れませんが、必ず理解できる時がきます。口語訳聖書だけが、「たといわたしたちの外なる人は滅びても」、「衰える」という言葉ではなく、「滅びる」という言葉を使っています。私たちの肉体は、衰え、やがて滅びていく存在なのです。肉体を持つ私たちは、その年齢に従って、衰えるのです。ガタが来るのです。それが人間なのです。そのような存在ではあるけれども、パウロは、「落胆しません。」と言うのです。

外なる人、肉体は衰え、滅びに向かおうとも、「内なる人は日々新たにされていきます。」というのです。詳訳聖書を見ると、「私たちの外側の人は（だんだんと）朽ちて（衰えて）いきますが、私たちの内側の自分は、日に日に（だんだんと）新しくされていくのです。」とあります。外側の人は朽ちる、と表現しています。私たちは、老いることにおいて、あるいは病において衰える、朽ちる、滅びることがあるのです。しかし、私たちの内なる人、内にある力は、日々新しくされると宣言するのです。イエス様を救い主と信じる信仰は、私たちの内なる人を、日々新しくするのです。

17節には、今私たちが経験する苦しみや悲しみ、痛みや絶望は、やがて神様から与えられる神様からの祝福に比べたら、取るに足りないというのです。女性が苦しみの中で、大変な痛みの中で出産します。しかし、新しい命が与えられたことで、苦しみや痛みを忘れ、この子の誕生ゆえに、その痛みや苦しみは取るに足りないと感じられたのではないのでしょうか。それどころではない。私たちが、今どのような絶望や希望のない歩み、光が見えない艱難を経験しようとも、神様の恵みと祝福の前には、比べのものにはならないほどの素晴らしいものが備えられているのです。

18節を共に読みましょう。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

新改訳聖書の改訂版では、「見えないものにこそ目を留めます。」とあります。リビングバイブルには、「ですから私たちは、いま見えるもの、すなわち、身の回りの苦しみには目をとめません。むしろ、今は見えない天にある喜びを望み見ているのです。苦しみは、やがて消え去ります。しかし、その喜びは永遠に続くのです。」とあります。

私たちは、見えるものも大切にしたいと思います。しかし、見えないもの、愛、心、希望、未来、自分を生かしている力をより大切にしたいと思うのです。何よりも、私たちが創造し、生かし、救いを与え、永遠の命、永遠に続喜びを与えて下さる神様に目を留めて、イエス様を信じて、信頼していきたいと思うのです。

### 三、神様に期待して生きる

「光陰矢の如し」と言われます。時はあっという間に過ぎ去ります。私たちは皆、いつか必ず老いを迎えなければなりませんし、今すでに迎えておられる方もいます。「人生の秋」（ヘルマン・ホルベルス著）という本の中にある詩があります。「最上の業」という題です。

「この世の最上の業は何？楽しい心で年をとり、働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、失望しそうな時に希望し、従順に平静に、おのれの十字架を担う。若者が元氣一杯で歩むのを見ても、ねたまず、人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱って、もはや人のために役立たずとも、親切で柔和であること。老いの重荷は、神の賜物。古びた心にこれで最後の磨きをかける。誠の故郷に行くために己をこの世につなぐ鎖を少しずつ外してゆくのはまことにえらい仕事。こうして、何もできなくなればそれを謙虚に承諾するのだ。神は最後に、一番よい仕事を残して下さる。それは祈りだ。手は何も出来ないけれども最後まで合掌できる愛するすべての人の上に神の恵みを求めるために。すべてを成し終えたら臨終の床に、神の声を聞くだらう『来たれ我が友よ。我汝を見捨てじ。』と。「美しく老いる」とは、このような事ではないでしょうか。

渡辺和子さんは、次のように語ります。「私自身、老いるということ、また、その自覚を持つことは、自分に磨きをかけるラストチャンスだと思う。持ち時間も、体力も、気力さえも確実に減ってゆくのだとすれば、若い時のように、多くのことに興味を示したり、行動したりする余裕はなくなり、本当に大切なこと、必要なことを選んでするようになる。かくて、老いるということは、個性的になるチャンスなのだ。人間関係においても、老いるに従って、量から質へと徐々に変わっていく。」

信徒の友の「**祈り**」という文章があります。次のようなものです。「**神様さま、最近教会の階段をのぼることがつらくなりました。目もうすくなり、聖書の小さな文字が読みにくくなりました。せっかく礼拝に出ても説教の言葉が聞き取れないことがあります。もっと情けないことは、今読んだり、聞いたりしたことをすぐに忘れてしまうことです。ああ、神さま、私は古い、私の体はすっかり衰えました。でも、神さま、主の日の朝、このようにして礼拝の場にいるだけで、私は満たされます。あなたの恵みがじんわりと体内に沁み通ってくるようです。今日も礼拝に出席できて幸いだった、と心の底から思います。神さま、これからの1週間、体調を整えて、また来週も礼拝に出てまいります。どうかこの願いをかなえてください。そして、さらに一歩あなたに近づくことを得させてください。」**

私たちの外なる人は衰えて行きます。しかし、その衰えの現実を受け入れつつ、それを悲しむのでも、落胆するのでもなく、私たちの内なる所を日々新しくして下さる神様を信じて、神様に全てをお任せして、祈りを捧げつつ、信仰生活を歩みたいと思うのです。

### Ⅲ 結論部

老年期とは、離別を教える学校だ、と言った人がいます。確かに、老年期は離別あるいは、喪失と言えるでしょう。愛する人との別れ、大事にしていた物との分かれ、自分自身の身体的能力を奪われ、最後には死、つまり、自分自身そのものとも別れる、という現実を抱えています。しかも、それらの事柄と、自分一人で立ち向かわなければなりません。だれも、自分の代わりに死んでくれる人はいないからです。けれども、私たちは一人では

ありません。死に至るまでも、死後においてもイエス様が共にいて下さるのです。私たちを愛し、私たちの罪のために十字架にかかり、尊い血を流し、命まで私たちに捧げて下さったイエス様が共におられるのです。だから、心配しないでいいのです。大丈夫なのです。

「**人生の四季**」の中で、「**老いの重荷は、神の賜物**」とありましたが、それは、自分が神様の前に価値ある者として受け入れられていると知ることから来る心の想いです。この神様を心にお迎えする時、たとえ私達の肉体は衰えていくとしても、内側から日々新しくされる命に生きることができるのです。この命の中に豊かに生き、美しい老いを迎えていきたいものです。「美しく生きる」とは、年を重ねても、外見が若々しく見える、美しく見える、健康的であるというのではなくて、イエス様を心にお迎えして、内におられるお方が私たちに新しくして下さることを信じて歩むことだと思うのです。老いるということは不健康でも不健全なことでもありません。出来ることなら健康的に老いることを目指したいものです。健康的に老いるとは、心まで老いないことであり、霊的な祝福を神様から与えられ続けることではないでしょうか。この週も、イエス様が私たちに日々新しくして下さることを信じて、イエス様を信頼して、イエス様と共に歩んでまいりましょう。